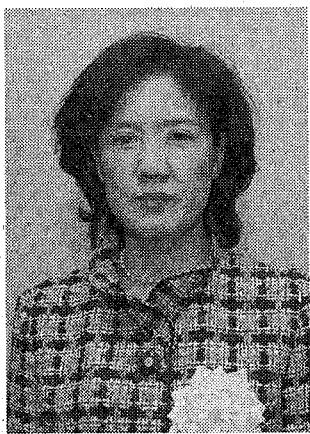


# 海外から見た震災

## 識者 評論



韓国  
世宗大教授  
朴裕河

一瞬にして2万人を超す人々が死亡したり行方不明になり、数十万人の被災者を出すような出来事が日本で起こってしまった。被害はさらに増える可能性もあり、目を疑いたくなる惨状に胸のつぶれるような思い

をしている。悲劇は、遠くにいる人にさえ心の傷を負わせる。そのまっただ中にいた人たちの傷はいったいどのようなものだろうか。

「日本沈没」とのタイトルをヘッドラインにした心ない新聞や、植民地時代に受けた被害を思い出しては冷やかだった人もいなかったわけではない。しかし、今、韓国では多くの人々が今回の日本の災難を深く悲しんでいる。詩人は詩を書き、歌手は慈善コンサートを開き、画家や写真家は

作品を被災者のために出している。そして経済、スポーツ、大学など、さまざまな方面の人たちが被災者たちのための募金を始めた。街頭では大学生たちが「がんばれ、日本」の張り幕を出して募金をしている。このような光景は、おそらくここ20年の日韓のさまざまな交流の結果なのだろう。

# 日本を知る土台に

う。1998年の日本大衆文化開放以来、韓国の人々は、映画やドラマを通して日本人の素顔を見、ノビザで日本へ出かけて日本をじかに感じてきた。その意味では、反対を押し切って文化開放を決定した当時の

の愛情が間違いなく存在していた。今回のことは、最悪の出来事ではあったけれど、日本に対して過去の悪いイメージのみを持っていく世界の人々に戦後の日本人を見てもらう機会になったのかもしれない。韓国でも、心ない行動や言葉を戒める声が圧倒的に大きかった。歴史問題をめぐる葛藤がいまだ続いてはいても、今回のことは、ほんとうの和解をなし遂げられる、いつかの日にむけた土台となるのだろうか。せめて、歴史に翻弄された過去の日本人の、欲望だけでなく悲しみも、やがて理解されるようになることを願っている。

大統領の決断や、韓国をノビザ国とした日本の措置がひととき輝いた瞬間でもあった。しかし、韓国の人々の心を開いたのは、何よりも、そのようにして見えてきた日本のすばらしさである。今回の災難に対しての世

界中からの関心と支援は、必ずしも日本が行ってきた災難援助へのお返しだけではないだろう。そこには、政治・経済的次元を超えて

た。韓国の人々は今回の事態を通じ、普通の日本人の人間としての姿に接している。これが日本を知る土台になればと思う。日本の災難に対しての世

界中からの関心と支援は、必ずしも日本が行ってきた災難援助へのお返しだけではないだろう。そこには、政治・経済的次元を超えて

パク・ユハ 57年ソウル生まれ。慶応大文学科卒、早稲田大大学院博士課程修了。著書に「和解のために」教科書・慰安婦・靖国・独島など。07年に第7回大仏次郎論壇賞受賞。